

# Essay

Sapiarc.com

2013年2月11日(2013-2)

## 真相を知って拍子抜けしたこと—歴史のひとこま

世の中には、知って良かったということと、知らないままでいた方が良かったかもしれないということがある。それでも、普通は知りたいと思うのではないだろうか。今回これを書くのは、私が前から知りたいと思っていたことがわかったからなのだが、それがわかったことによって拍子抜けしたと同時に、後味の悪さも感じている。

既に旧聞に属するが、たまたまめくっていた文芸春秋創刊90周年記念二月特大号の中のある記事がふと私の目に止まった。『日本が震撼した47大事件の「目撃者」』という大きな題の記事の中の1事件についてのものなので、長いものではなく、2ページに満たないものだ。

この記事の題を見てハッとしたのは、「目撃者」である著者が江橋慎四郎(東京大学名誉教授)となっていたからだ。記事の題は「昭和18年 学徒出陣 答辞の言葉は忘れませんでした」。ここまで読んで、何かピンと来るものがある人は私より年上に違いない。

太平洋戦争の趨勢が不利に傾き始めた昭和18年10月、それまで兵役に就く義務が延期されていた大学などの高等教育機関の学生も、20歳に達していれば、軍隊に入ることが義務付けられた。ただし、このとき対象となったのは文科系の学生だけだった。この措置によって繰り上げ卒業(実質は中途退学)した学生数は約2万人だったと言われている。当時は、今とは違って、大学などの数が少なく、20歳に達し

ていた文科系の学生数はこの程度のものだったようだ。

しかし、「学徒出陣」の影響は大きかった。Wikipediaには、「学徒出陣」の状況に関するかなり詳しい説明が掲載されている。全国の主要都市で「出陣学徒壮行会」が開催されたのだが、その中でも昭和18年(1943年)10月21日東京で行われた壮行会は日本放送協会(当時NHKとは言わなかった)が2時間半にわたって実況中継し(もちろんラジオで)、そのとき撮影された写真や映画は今でもときどきテレビに出てくることがある。

場所は神宮外苑陸上競技場、文部省主催、陸・海軍省後援だった。5万人と言われる多数の観客が見守るなか、東京帝国大学の学生団を先頭に、77校の学生団が軍隊式の分列行進を行った。上記の江橋氏の手記によると、当日は朝から雨が降っていたのだが、この行進が始まる前に止んだのだそうだ。これは、せめてもの饞だったと言える。写真で見ると、学生は学帽・制服姿だが、足にはゲートルを巻き、肩には銃を担いでいる。当時の大学では、教練という名の軍事訓練が必修だったので、銃を持つことには慣れていただろうが、それが発砲できる本物だったのかどうか、私は知らない。

分列行進を終わって、場内に整列した学生たちに向かって、最初に岡部長景文部大臣が開戦詔書を読み上げ、次に東條英機首相が訓示を述べた。今でもこの訓示もときどきテレビに出てくるが、独特の甲高い声で、学生が戦陣に赴く

ことの必要性を訴え、激励したものだ。しかし、上記の文芸春秋の手記で、江橋氏は『何を言ったのか、ほとんど記憶にありません。』と書いている。そういうものだろうと思う。

その後、江橋氏によると、『慶応義塾の学生が弱々しく送辞を読んだ』そうだが、これはまったく知られていないことではないかと思う。次に、出陣する学生を代表して、東京帝国大学文学部学生だった江橋慎四郎氏が答辞を読んだのだが、この答辞はよく知られている。長いものではないが、有名な「生等もとより生還を期せず」という文章が含まれている後半部分を下に引用しておく。文語調で今は使われない語句が多く、旧かなづかいなので、読みにくいものだが、言わんとするところは明らかである。

『(前略)然れども、暴虐飽くなき敵米英は今やその厖大なる物資と生産力を擁し、あらゆる科学力を動員し、我に対して必死の反抗を試み、決戦相次ぐ戦局の様相は日を追って、熾烈の度を加え、事態益々重大なるものあり。時なる哉、学徒出陣の勅令公布せらる。予ねて愛国の表情を僅かに学園の内外にのみ迸しめ得たりし生等は、是に優渥なる聖旨を奉体して、勇躍軍務に従ふを得るに至れるなり。豈に感奮興起せざらんや。

生等今や、見敵必殺の銃剣をひっ提げ、積年忍苦の精進研鑽を挙げて悉くこの光荣ある重任に捧げ、挺身以て頑敵を撃滅せん。生等もとより生還を期せず。在学学徒諸兄、また遠からずして生等に続き出陣の上は、屍を乗り越え乗り越え、邁往敢闘、以て大東亜戦争を完遂し、上宸襟を安んじ奉り、皇国を富岳の寿きに置かざるべからず。かくの如きは皇国学徒の本願とするところ、生等の断じて行する信条なり。

生等謹んで宣戦の大詔を奉戴し、益々、必勝の信念に透徹し、いよいよ不撓不屈の闘魂を磨礪し、強靱なる体躯を堅持して、決戦場裡に突進し、誓って皇国の万一に報い奉り、必ず各位の御期待に背かざらんとす。決意の一端を開陳し、以て答辞となす。』

これは、国家の危機を救うために立ち上がろうとする学徒の悲愴な決意を見事に表現した名文だと言え、当時の人々を深く感動させたであろうし、実際競技場に参加していた女子学生などは涙を流した人が多かったと聞く。私が今読んでも気圧されるものがある。

ところが、私が拍子抜けしたのは、江橋氏が次のように書いているからだ。『(この)答辞の文章は、私が書いたわけではありません。宣誓文を書けとは言われましたが、文才もないし、味もそっけもないものしか書けなかったので、国文科出身の学生主事(事務官)が添削して、素晴らしい文章に仕上げてくださいました。もっとも、今覚えているのは「明治神宮外苑は」という冒頭の言葉ぐらいです。』

私は、江橋氏は文学部出身で、戦後東大教授になった人だということは知っていたが、年が16歳も違い、かつ学部が違うので、面識はなかった。しかし、どういう人かは知りたいと思っていた。学生時代にこれだけの文章を書いた人だから、文学部のどこかの教授だったに違いないと思い込んでいた。そういうわけで、この文芸春秋の手記を読むまで、江橋氏が教育学部の教授で、専門は社会体育学・レクリエーション学だったことを知らなかった。同氏は、東大教授になる前は文部官僚だったそうで、そういうことも関係しているのかもしれないが、鹿屋体育大学の設立に関係して、初代学長を務めた。このことも、今回この手記ではじめて知った。

上記の答辞にある「生等もとより生還を期せず」の「生等」という言い方は、今は使われないが、「私たち」という意味だ。この言葉どおりに、多くの学徒出身者が戦陣に倒れ、また特攻隊員として出撃して帰らなかった。戦後シベリアに抑留されて、苦勞した人も多い。私の母方の叔父もそのひとりだった。叔父は東京帝大法学部にて在学しており、まさにこの神宮外苑での壮行会に出席しているはずだったのだが、自宅が大阪府(現在の茨木市)にあって、奈良の師団に入隊する予定だったため、壮行会当日には既に自宅に戻っていて、壮行会には出なかった。

---

叔父は、奈良の師団での新兵教育でしごかれた後、幹部候補生試験に合格し、見習士官を経て少尉となったが、終戦時には満州に居たため、シベリア（実際はヨーロッパロシア）に約2年間抑留された。しかし、帰国することができたのだから、運が良かった方だと言えるだろう。

その叔父から直接聞いたことだが、神宮競技場では、壮行会が終わった直後、観客席にいた各種専門学校などの女子学生たちが雪崩を打って競技場内に入り込み、出陣する学生らを間近に見送ったそうだ。このことは広く知られてはいないと思うが、叔父の連れ合い、つまり叔母の高等女学校(神戸)の同級生で東京の専門学校に進学した女性が実際にその場において、そういうことがあったことを語ったのだそうだ。これは良い話だと思う。戦時中の異常な雰囲気の中かでも、若い女性たちは自分たちの結婚相手になるかもしれない男たちが死地に赴くのを、黙って見過ごすことは本能的にできなかったのだろう。

ところで、江橋氏のことだが、彼は内地勤務になり、幹部候補生コースを経て、立川にあった陸軍航空審査部に配属されて、終戦を迎えた。自分でも運が良かったと書いている。「生等もとより生還を期せず」と言った江橋氏が楽な内地勤務に就いていたことで、戦後同氏はいろいろなことを言われてきたようだ。そういうこともあって、答辞については一切ノーコメントで通してきた。今回の手記は、江橋氏が答辞についてはじめて書いたもので、その意味では貴重なものだ。92歳という高齢になったので、もう本当のことを書いても良いだろうという気持ちになったのではないだろうか。

歴史の出来事には、裏があって当たり前なのかもしれないが、今回の手記には、何か割り切れないもの、裏切られたような感じを持つ人が多いのではないだろうか。（おわり）